

日本文学研究資料叢書

私 小 説

有 精 堂

日本文学研究資料叢書

私小説

広津和郎・宇野浩二
葛西善蔵・嘉村礒多

日本文学研究資料刊行会編

有精堂

日本文学研究資料叢書

ISBN4-640-32501-0

私 小 説

定価 3200 円

昭和 58 年 5 月 1 日 発行

編 者 日本文学研究資料刊行会

発行者 有精堂出版株式会社

代表者 山 崎 誠

101 東京都千代田区神田神保町 1—39

発行所 有精堂出版株式会社

電話03(291)1521~3番

振替口座 東京 9—40684

Printed in Japan

ISBN4-640-30092-1 C3393

『日本文学研究資料叢書』刊行に際して

日本文学の研究は、戦後三十数年を経て、再検討と新しい方法への模索が試みられ、転換期にあると言われております。そうした状況のなかで、未来に開かれた日本文学研究を形成して行くためには、当然のことですが、従来の研究業績を正しく評価し、その基礎の上に新しい成果を積み重ねることを志向しなければなりません。

本叢書はそうした要請に答えて、日本文学研究の未来に賭けられた可能性のために刊行されたものです。今や、国文学界も、マス・コミュニケーションの時代は避けられず、多数、多種の情報が、錯綜し、混乱して伝達され、その氾濫は真の学問的交流を阻害するようになっていくようにさえ見えます。膨大な著作・雑誌・紀要等々が刊行され、それらのうちには、入手しようとしても、往々図書館にさえ具備されていないといったように、種々の困難が、そうした錯綜の上に重なり、学問の発展を阻害する壁として立ち塞がっているのが現状です。こうした時代の中で、真に学問的なコミュニケーションを確保するために、本叢書は有効的な役割を果たす決意で刊行されたものです。

本叢書は、既発表の研究論文のなかから、従来の研究に大きな意味を持っているもの、あるいは新しい可能性を開拓しているものなどを選択し、各時代・ジャンル・作家・作品ごとに論集として編集し、各研究分野の、基礎的・基本的な情報を、出来る限り有効的に提供することを目標としたものです。また現代の日本文学研究の動向が、本叢書によって総覧でき、今後の進路を導く羅針盤でありたいと希望しております。

日本文学の研究者、特に若い未来にのみ存在する研究者に、本叢書の趣旨が期待され、支援され、永続的な事業として継続される力を与えて下さるように願ってやみません。

目次

広津和郎

広津和郎論——その「弱さ」と「強さ」——	橋本迪夫……一
「性格破産者」の史的意味……	高田瑞穂……二〇
——広津和郎の作家的出発——	

広津和郎論——第一主題の作品について——	山田昭夫……三
初期の広津和郎——センチメンタリズムの排斥——	榎林滉二……四
散文精神への道——昭和十年前後の広津和郎——	関口安義……五
文学者流の考え方——広津和郎について——	多田道太郎……七
われわれのための遺産……	石母田正……八

宇野浩二

「清一郎 夢見る子」論——宇野浩二の文学的出発——	森本 穫……三
---------------------------	---------

〈文壇新人論〉 宇野浩二論……………舟木重信…一〇六

「苦の世界」論……………渋川 曉…一二八

宇野浩二氏の近業に就て……………辻野久憲…一二七

宇野浩二論……………矢崎 弾…一三三

宇野浩二の嘘と真実……………中島健蔵…一四四

夢見る部屋の構図……………篠田 一士…一五〇

葛西善蔵

葛西善蔵論……………間宮茂輔…一七〇

葛西善蔵と私小説……………山室 静…一七〇

葛西善蔵仮説……………田中保隆…一七四

葛西善蔵と私小説……………大森 澄雄…一八二

葛西善蔵論——「哀しき父」をめぐる——……………佐々木雅発…一九二

「遁走」論……………榎本隆司…二〇三

「出奔」小考——葛西善蔵の代作問題をめぐって——……………中村 友…二四四

私小説の文体——葛西善藏を中心に——……………根岸正純…三〇四

嘉村礒多

嘉村礒多について——仮面の私小説家としての——……………太田静一…三〇三

嘉村礒多論——中産階級者の文学——……………武田庄三郎…二四〇

嘉村礒多小論——創作態度を中心として——……………山田昭夫…二五〇

嘉村礒多……………渋川 驍…二六二

嘉村礒多氏の場合——私小説の問題に關聯して——……………辻野久憲…二七四

私小説の周辺——嘉村礒多論——……………日沼倫太郎…二八〇

人間——嘉村礒多・その書簡から——……………中野好夫…二八八

解説……………関口安義…二九六

私小説研究参考文献……………関口安義…三二二

執筆者一覧……………三二五

広津和郎論

——その「弱さ」と「強さ」——

橋本 迪夫

一

昭和十二年三月、日華事変が始まる少し前に広津和郎が書いた『弱さ』と『強さ』と題する感想がある。その中で彼は大体次のようなことを述べている。

自分の短篇小説「心臓の問題」について、あれは要するに消極主義の弱虫の泣言だという批評があったが、それは当然の批評ではない。自分が文学に携っている一番の原因はどうやら自分の「弱さ」にあるらしい。先月或る雑誌社から「われら如何に生くべきか」という題で感想を書くことを求められたが、呻吟してついに一行も書けなかった。数年前の自分なら、こういう問題はインテリの階級的役割とかその氣質を説いて、それによって多少の啓蒙的意義があることを自負できたが、政治がこうも直接市民生活に響いて来る現在となつては白々しくてとてもそんな答案は書けない。政治形態をわれわれが生きるに適するように変更でもしない限り、どんな答案を書いても空になるという焦燥が先立ってしまう。實際今の世の中では外部のざ

わめきから自己を切り離して内心の満足や個人の修養を説いた所で一つのナンセンスに過ぎない。そこでちょっと自分が政治家になることを空想して見たが、その場合結局問題になるのは自分の弱い心情である。政治家の心臓などというものは到底文学者である自分にはわからない。政治家は大局のために目の細かいヒューマンな事象に対しては、ともすれば都合よく眼をつぶろうとする。しかし、文学者の弱い心臓は人間性と背馳する些細なものを見てもすぐに波立ち、人類の犯すあらゆる非人間性に対して反逆しようとする。彼らはむしろ弱いが故に反逆し、その反逆の方向に文学を選んだのである。自分も弱くて実社会の人間からいう「大人」になり切れないために文学に携っているのだ。

この感想はファッショ化した当時の時勢と、市民作家広津の抵抗という角度から読んでも興味ある問題を含んでいると思うが、今私と考えようとするのはその問題ではない。人間の性格の強弱というものについて、広津という作家が大正期以来の長い文学的生涯を通じて独自の解釈を購っているのではないかという疑問である。文学

者は弱いと自認しながらも、尚その弱さの価値を敢えて主張しようとする態度はどこに由来するのだろうか。

私はここで広津の出世作「神経病時代」を思い出す。この作品は大正文壇に「性格破産者」という人間典型を提出したことで有名である。性格破産者とは一口に言って現代に生きて行く上にはあまりに弱すぎる人間をさすのである。つまり彼にとって性格の弱さとは文学者としての出発当初から追求し、格闘し続けている人性論上のテーマなのだ。彼にとって性格の弱さとは何か。また逆に強さとは何か。両者はどのように関連しているか。それらを知る手がかりとして、まず「性格破産者」という人間像の意味を考えて見よう。

二

広津の評論に「性格破産」という言葉が初めて現われたのは、恐らく後に『わが文学論』に収められた「チェーホフの強み」においてであろう。もともと「チェーホフの強み」は執筆年度が『わが文学論』では大正四年になっているが、実は大正五年五月、金尾文淵堂から刊行された翻訳『接吻外八篇』の序文として書かれたものらしい。しかし、それ以前既に大正五年三月号の『新公論』に「チェーホフ小論」という彼の評論が載って居り、その内容は冒頭のアルツイバーシエフの思想を論じた部分を除けば「チェーホフの強み」と重なっている部分が多い。従って「チェーホフの強み」はこの「チェーホフ小論」に彼が手を入れて序文用に新たに書き直したものではなからうか。ともかく、その「チェーホフの強み」のなかに「現代露西亜の最大不幸は性格の破産だ」というチェーホフの言葉が初めて出て来るのである。

また、性格破産という言葉は使われていないが、彼が文芸評論家

としての筆を執り始めた雑誌『洪水以後』の創刊号（大正五年一月）の「ペンと鉛筆」には次のような趣旨の人性論が見られる。

今の日本に最も必要なものは思想ではない。その思想を根強いものにさせる「性格の厚み」こそ今我々が最も要求するものなのだ。本当の意味での強い弱いとは「積極的な事を云っているから強い、消極的な事を云っているから弱い」と云うように簡単に分け得るものではない。各人が生れて背負っている運命の重荷はそれぞれ異っているから、生活の歡喜を唱えている人と、生活の悲痛を唱えている人と案外生活力が相等しい場合もある。外面的に積極的な人が真に力を持っている場合も勿論あるが、外面的に消極的に見える者が、その心に却ってより以上の力を持っている場合もしばしばある。それを識別するのは批評家の務だ。

個性々々と呼ぶ若い人々の間に、ほとんど何らの個性をも示さない人をよく見かける。彼等は他人との境に塀を立てる事にばかり腐心して塀の中を明確に示そうとしない。塀がなければ他と混同されるような個性は捨ててしまいがよい。彼等が尊敬するトルストイは彼等を見て肩をひそめるであろう。あゝ、チェーホフが欲しい。今の日本にはチェーホフの材料が至る処に転がっている。チェーホフの描いた鏡の中に現代日本の焦躁が生けるが如く映っている。

このように彼の批評家としての第一声は、トルストイズムが流行し、個性や生命の成長が素朴に謳歌されていた当時の思想界に向って放たれた警告であった。思想よりもその思想を支える性格の厚みが問題なのだと彼は力説している。性格の厚みとは一種の性格の強さのことであろうが、彼の説明から考えると、その強さは積極的・

直線的なものであるよりも、消極的・弾力的な強さのように感じられる。そして、そのような意味での性格の強さをもった賢人として、その時チューホフの姿が彼の頭にひらめき、「あゝ、チューホフが欲しい」と云わせたのではなからうか。「チューホフの強み」が間もなく書かれた理由がそこにある。

「チューホフ程彼の住んでいた当時の露西亜を根本から理解した作家はなかった。そして彼が当時の到底救う事の出来ない露西亜の消極的廃滅の病原菌として発見したものは、社会状態の不幸と云う事でもなければ政府の圧迫と云う事でもなく、もつと根本的な、人間の性格の廃滅と云う事であった。」

（チューホフの強み）

この結果、「現代露西亜の最大不幸は性格の破産だ」という言葉が発せられたのである。また性格破産者とは具体的に云えば、チューホフの作中人物のように、統一された性格の厚みを持たず、神経の暗示のままに様々の悲喜劇を演ずる人間のことで、彼等に対する作者チューホフの批判と深い愛とがその作品の淋しいような、温いような、いわゆるチューホフ式気分を漂わせている。

広津はほぼこのように説くのであるが、ここから考えられることの一つは、彼が性格破産を一応社会や政治とは無関係な、人間内面の問題と見なしていたのではないかということである。当時の彼の眼は社会や政治の欠陥よりも個人の性格の欠陥に注がれていた。このことは当時彼が小川未明に与えた批評の中で、「人間の不幸を社会や外部から抽出する事を止めて、自分をよく解剖し、批評したならば、欠陥が外部になくて自分にあった事が解るであらう」と述べている処からも想像される。前記「チューホフ小論」のアルツイバーシエフを論じた部分にも「人生の幸福は革命家によって得られる

ものではない」というアルツイバーシエフの言葉が引かれている。性格破産がロシア全体を蔽う病理現象であるとすれば、我々はその背後の社会や政治との関連を考えなくてはならないが、彼の考えは如何であるうか。「社会状態の不幸と云う事でもなければ政府の圧迫と云う事でもなく、もつと根本的な」という表現には社会や政治の問題を人間の問題より低次元に置こうとする気持が感じられる。この気持はどこから生じているのだらうか。

『奇蹟』時代の習作「握手」の主人公は、肉体的にも性格的にも弱い、虚無的な心情を持った青年であるが、それでもベットの少女に愛を打ち明けられないで悩んでいる友人に向つて、「勇気を出して打ち明けてしまえ」と勵まし、「何、世間なんていうものはみんな意気地なしだ。此方が強くなりや、ぐらぐらとへこたれちまうよ。第一考えて見たまえ、我々が世の中に何が頼にさわるかつて探して見たって、目ぼしいものって何も出て来やしないじゃないか。……もし俺たちを圧迫する対象が見つかったら、俺はこの瘡を両手を揮つて、其奴を征服してやる」とりきみ返つて友人に握手を求めている。この小説の主人公の意識に入つて来るのは「社会」ではなくて「世間」であり、しかも、その「世間」はこちらが強くなりさえすれば、向うでへこたれてしまふような、ぐらぐらした存在としてしか主人公には意識されていない。この主人公の考え方をほぼ作者のそれとすれば、彼が性格の強弱を外部の要因によつて支配されぬ人間内部の問題と考えたことに無理はなからう。性格破産も自己の修養によつて克服できると当初の彼は考えていたようである。勿論このような考え方には明治末期から大正初期にかけての人格主義的思潮の反映を見るべきであらう。

次にこの評論を読んで気がつくのは、トルストイズムに対する彼

の反撥がチューホフへの共感と表裏して文面に表われていることである。彼はトルストイとチューホフの作品から与えられる教訓の質の相違を説いて、「チューホフのように決して人を叱る事なく、唯自然に人の心に自省を与えて行くのと、トルストイのように教を以て人生におつかぶせて行くのと果してどちらが効果的か」と暗にチューホフへの共感をほのめかしている。彼は宗教や道徳で人間を金縛りにしてしまふトルストイズムを嫌い、人生に何の範疇をも作らず、すべてをありのままに見、しかも弱い民衆、時には性格破産者をも庇おうとするチューホフに親しみを感じていたのである。

さて「チューホフの強み」が書かれた大正五年は彼の年譜にいう「最も心暗き時代」の初めの年に当っている。従つて、この評論で彼が提出した性格破産の問題にせよ、トルストイズムへの反撥にせよ、当時の彼が直面していた人生の危機に密接につながっていたのである。そのことは引續いて「芸術家時代と宗教家時代」、「人道主義の定義」等、彼独自のトルストイズム批判が重ねられるにつれて明らかになって来た。それらの評論に窺われる狭い道徳主義に対する反撥や焦躁が自己の成長を害するという自覚等は、他ならぬ彼自身の実生活から得られたかけがえのない認識だったと云えよう。

このようにして彼はトルストイズム全盛のさなかにトルストイズム批判のしめくりとして「怒れるトルストイ」を書いた。最初『トルストイ研究』の大正五年十二月号に「トルストイとチューホフ」を発表した時には明らかに両者を比較しようとする意図が窺われた。しかし彼は続稿からその意図を放棄し、構想を新たににして「怒れるトルストイ」と改題し、全力を挙げてこの巨人にぶつかって行った（大正六年二月—三月『トルストイ研究』に分載）。

トルストイがキリストの五誠の中で「悪によつて悪に抗する勿

れ」を最重要視した結果、より根本的な「怒る勿れ」が忘れ去られたという点に立論の手がかりを求め、晩年の転機以後の作品に著しく現われた「トルストイの怒り」を認識不足のヒステリー性のものときめつけたこの評論は、その大胆な論調のために当時は一種の破トルストイ論と受け取られたらしい。しかし彼の批判の対象は「復活」を除く晩年のトルストイに限られ、「戦争と平和」の偉大さには彼も讃辭を惜しまないのである。彼はただ時の風潮に左右されず、自己の問題意識に即して独自のトルストイ像を描き上げたにすぎない。たとえば彼は次のような意味のことを云つてゐる。

「怒る勿れ」という戒めを忘れ、現代文明に対する憤慨と呪詛のあまり、焦躁に駆られたトルストイはついに生を死への準備と考えるようになり、その結果人類最強の生活力を持つトルストイが「主人と下僕」のニキタのような人類最弱の生活力しか持たない人物を理想とするような奇妙な矛盾に陥っている。またトルストイは肉食の反道徳性を説くのによく屠殺場のむごたらしい場面を描き出したが、そんなことは程度問題にして置かなければならない。トマス・ハーディーの小説の主人公ジュードは切られた木の幹からしみ出す樹液を見て眼を蔽うような人物であるが、この弱い感情が彼の一生を不幸にしている。この事をよく考えて見ると、弱い人間ほどそういう事に感動するのである。弱い人間ほどトルストイの言葉を借りれば、そんな事にまで道徳的意識を持てるのである。だから肉食の罪悪などは取り立てない方がよいのだ。

この評論で注目されるのは、トルストイの論理の矛盾を鋭く衝いた部分よりも、むしろ彼自身の問題意識に直結したこのような部分ではなからうか。それは人生における弱者の生き方について考えさ

せているからである。「あまりに弱過ぎる人間にはむしろその反対の修養が必要ではないか」と、彼は「怒れるトルストイ」に対する非難への反論として書かれた「如何なる点から杜鵑を見るか」の中でも述べている。それではニキタやシェードのような弱者を理想としたトルストイ的倫理の裏を返せば、どのような思想が生まれるであらうか。

「アルツイバアシエフ論」（大正六年五月『早稲田文学』⁽⁵⁾）はこのような方向への転換の一つの試みであった。「世界は一人の人間がその欲するところを他の人達に邪魔をせずに為し得るほど大きいと思つてゐる」というアルツイバアシエフは絶対の自由を信奉する極端な個人主義者である。その代表作「サニン」の主人公であるサニンはトルストイの「主人と下僕」の主人公ニキタとは対照的な人物である。トルストイは欲望を否定し、快楽を罪惡視する。アルツイバアシエフの創造したサニンは欲望を隠すことなく、人間が自由自在にあらゆる快楽を味わえるユートピアを空想している。この本能満足主義と混同される危険を含み、事実サーニズムなる流行語まで生んだ「サニン」の作者に対して、彼はトルストイと同じ人道主義者の名を冠せようとしたのである。彼はアルツイバアシエフの思想を自己の言葉に置き替へながら次のように説いている。

「一切は空だ、そしてそれで好いのだ。否、好いも悪いもない、仕方がないのだ。これが真実なのだ」。しかるに人は自らの弱さからこの真実を直視することを恐れ、自己以外に空虚な幻影を描いては自縄自縛に陥つてゐる。だから人間は自己の真実を直視する「性格の強さ」を持たねばならない。このような強さを持たぬ人間を「自己を持たざる人間」としてアルツイバアシエフは輕蔑し、徹底的に蹂躪した。

「道は我に在る、我以外の何ものにもない」という禪の境地にも似たアルツイバアシエフの思想はここまででは彼の心を捉えている。しかしすべての人間の弱さと愚劣さに絶望したサニンが自分の村を捨て、乗った汽車からも飛び降りて曠野の中に姿を消すというこの小説の結末は彼を満足させることができない。「この人間界を除いてサニンの空想するユートピアの出現する余地がどこにあろう。サニンは戻らなくてもよいが作者アルツイバアシエフは必ず人間界に立戻らなければならぬ」と彼は強調している。恐らく彼はアルツイバアシエフがその強い自我主義と社会との調和をはかる思想を示してくれることを期待していたのだろう。しかしこの期待は裏切られ、次に彼の前に現われたのは恐ろしい人類絶滅の思想ナウモフィズムであつた。極端から極端へ、生の論理から死の論理へと突つ走つたアルツイバアシエフに彼は幻滅を感じ、「アルツイバアシエフ論」は未完のまま終つてゐる。

さて自己固有の問題意識から出発した人性論を「怒れるトルストイ」と「アルツイバアシエフ論」という対照的な二つの方向へ展開させた後、彼は新たに「自由と責任」とについての考察を書いた。（大正六年七月『新潮』）

この評論で彼はアルツイバアシエフの絶対自由の思想には多大の共感を寄せながら、そこから導き出された「人間は絶対自由だから何の責任もない」という結論には真向から反対を唱へてゐる。すなわち彼によれば「絶対自由だからこそ、人間は責任を感じなければならぬ」のである。そして、ここから「真の個人主義者は最も責任感の強い人間でなければならぬ」という信念が披瀝されている。しかしこの評論で興味深く思われるのは、むしろ自己の傷つきやすい氣質について告白した後半の部分であらう。そこでは彼は日常

生活に即して、ちょっとした悲惨な出来事からも鋭い心臓の圧迫を感じる体験や、虫一匹殺せない神経質な自己の気質等が語られている。彼はそのような自己の気質や感情の動きを人間的な感情としては認せず、自己の個性の完成を乱す最大の毒素と見て、何とか圧殺してしまいたいと念じている。しかし一方、全然そういう感情が欠如してしまふ事はあまりにもこの人間世界に対して無責任になってしまうことだとも考えているようである。

このようにして彼の初期の評論・創作のすべてに通ずるモチーフをなす所の「無責任な強者となることも堪らなければ、道德的意識（罪惡に対する鋭敏感）過剰の弱者となることも堪らない」という彼固有のジレンマが生じたのである。このジレンマを巧みにアレゴリー化したのが「岩野泡鳴氏に与う」（大正六年八月『早稲田文学』）の末尾に書き足され、後、その部分だけ切りはなして『作者の感想』に収められた「蚤と雞」という感想である。それは次のような話である。

昔、殺生をしない主義を極端に守った者が夏の蚤の始末に悩まされ、工夫を凝らしたあげく、蚤を竹筒に封じ込め、川に投げ捨てて後をも見ずに逃げ帰った。蚤は結局殺されたではないか。またそれとは逆のこんな話もある。雞の肉を柔かく食べ易くするために雞の眼をつぶして運動不足に陥れる飼育法が行われている。人間は何と極端な残酷な事をするのだろう。しかしこの両者のような態度をとっている人間はこの世の中に沢山居るらしい。文壇思想界にも嘗て雞の眼をつぶすことを「徹底的」だと思ふ傾向がはやった。自然主義が生み出した悪いセンチメンタリズムがそれである。そうかと思ふと最近はその始末に困って竹筒を川に投げ込みに行きそうな人間がふえて来る形

勢である。こうした認識不足のセンチメンタリズムをも自分は好まない。

彼が雞の例で攻撃しているのが自然主義の一部の偽惡的な態度であり、蚤の例のそれが当時文壇を占領しつつあったトルストイアンに向けて放たれた矢であることはほぼ想像がつくであろう。彼はこの両者の態度のいずれにも傾きえないと断言する。そしてこのジレンマを正しく導くのは「自然と不自然とを敏感に見分けるハート」だと云う。

しかし、このような処方箋が出たにもかかわらず、彼のジレンマはなお果てしなく続いた。次に彼が手をつけたのはチェーホフから学んだ性格破産者の構想を日本の現実にあてはめ、創作の上に典型化しようとする野心的な試みであった。こうして彼の文壇への出世作となった力作「神経病時代」が大正六年十月の『中央公論』誌上に発表されたのである。

三

「神経病時代」の主人公であるS新聞の記者鈴木定吉は完全な性格破産者である。彼は性来意志の力に欠け、物事に対して繊弱な感性を働かすだけで統一した意見を持つことができない。彼はほんの少しでも衝撃的な光景に接すると、忽ち「あつ」と潰れんばかりの心臓の痛みを感じる。それは「愛」とか「同情」とか云うよりも、性格の破綻から来る末梢神経のそよぎであった。彼の意識と行動の分裂状態はみじめで、時には滑稽を感じさせるほどである。しかし、その半面彼はほんのちょっとした事でも嘘のつけぬ正直者であり、静かな田園生活を夢みるトルストイアンでもある。では彼の周囲の友人達はどうかであろうか。比較的常識家らしい相川は別とし

て、若々しく純潔な河野は愛の告白に定吉の助けを借りようとする気弱な青年であり、定吉には人生に対して憎えない「強さ」の持主と思われている遠山にしても客観的に見れば酒を飲みながら空虚な気炎を吐く日本版マルメラアドフにすぎない。

それでは彼がこの作品に「神経病時代」と名づけた理由は主人公とその友人達の「性格破産」にあり、この作の目的は当時の知識青年層の戯画を描くことにあつたのだろうか。確かにその通りだといえる。しかし、この作から受ける感じでは何となくそれだけではないうような気がする。この作の主人公は新聞記者として決して有能とは思われないが、良心的であつたとは云えよう。社会部長の留守に編集を担当して超弩艦の座礁事件を載せてしまった出来事にせよ、非難に値するのはむしろ彼を叱り飛ばしたり、嘲けつたりした社長や外交部長の方で、彼は恐縮し、低頭せずともよかったのである。同じ日の午後起つた或る博士の娘の投身事件に対しては興味本位に扱おうとした外交部長とは逆に、彼は博士夫人の気持に同情して詳しい報道を避けている。これも民衆のプライバシーを尊重する正常で、健康な感覚に基いていると云えよう。

主人公に対する同情的な描き方に比べると、S社側の人々に対する作者の取扱いはかなり類型的で冷たい感じがする。社長や外交部長、或いはその他の社員にしても、むしろ性格破産者以上の「自己のなさ」と腐敗ぶりを示している。そのために作者は性格破産者の周辺に図々しい、もしくは要領のよい悪役を描き出すことによつて、性格破産者に幾分かの同情を惹こうとしているのではないかという印象さえ与える。恐らくそういう意図は作者にはなかったであろう。しかし性格破産者に対する作者の同情が無意識にそういう表現効果をねらわせたと言つては言い過ぎであらうか。

「神経病時代」発表後間もなく書かれた「性格破産者のために」という文章の中で彼は次のように述べている。

「私は現代の日本には、性格的に破産している多数の人間の住んでいることを知っている。性格の破産していない人間は、誘惑に打克つとかそれに打負かされるとかに依つて、救われたり、墮落したりする。けれども性格破産者はそういうわけには行かない。彼等にとつての問題はそんなことではない。トルストイの道徳やイブセンの社会問題や、そういうものではない。どうすることも出来ないような欠陥が彼等にはある。彼等は状態を如何に変えても救われないのだ。（中略）私は彼等を愛し、彼等を気の毒に思っている。が、彼等の有様にかなり失望を感じている。どうしたら彼等が救われるべきものであるか、その方法が今の私にはまるで解らない。そこで私は憂鬱に襲われる。」

（大正六年十二月「新潮」）

以上の文から次のようなことが云えるのではなからうか。一つは性格破産者とは墮落した人間とか、社会生活の不適合者を意味するのではないということである。性格破産者とは決してアウトロウ的な存在ではなく、むしろ社会生活に外面的には順応することによつて却つて自己の性格を喪失した者のことである。彼は「死屍を抱いて」をめぐつて菊池寛と論争した時、「菊池寛氏に答う」という反駁文の中で性格破産者という言葉が変に流行的になったことを苦々しく思うと述べ、生活の外形から判断して少しでも常識と違った人間は悉く性格破産者扱いされる風潮に憤慨している。そして葛西善藏を性格破産者扱いした月評に反駁して、彼こそ現代で性格の破産していない人間の一人なのだと強調している。そう云えば「神経病時代」の主人公などは、葛西のおもかげを写したらしい遠山に比べ

てよほど常識的な人物であり、人並以上に悪い事のできない、小さな正直者にすぎない。性格破産者の性格が意外に健康で常識的な面をも具えていることは前にも述べた通りである。彼は性格破産者そのような人物として描いたのは、性格破産者に批判と同時に愛を感じていた証拠であり、更に突込んで云えば彼自身が自己の中に性格破産者を意識していた為ではないかと思われる。

このような作者の気持を反映して、この作には性格破産者の滑稽なみじめさばかりでなく、詐欺や鉄面皮で出来上っているような社会への反撥や、まるで自己というものを持っていない衆愚の雷同性の評者が「此篇に描けるところは正しく現代の病弊である」と指摘しながら、「こういう人々（性格破産者をさす）の間により多くの真実が蔵されているという事も恐らく事実である」と好意ある批評を寄せたのもこの点を感じとったからではなからうか。

しかし、政府攻撃の国民大会での群衆の昂奮にわけの分らない附和雷同性を看取った定吉が一転して「俺は一体それなら何の意見を持っているのだ？俺は一体どんな生活をしているのだ？」という鋭い自己反省に襲われているように、生活が破綻し、性格があまりに小粒で弱すぎる定吉を主人公としてはその口から時代批判を語らせることは不可能であろう。それどころか初めは性格破産者の性格の改造に望をつないでいた彼もついに彼等の救いようのなさに絶望している。

「二人の不幸者」は「神経病時代」に続いて性格破産者を扱った長篇であるが、この作の成立について彼が洩らしている消息によれば、彼はこの作の主人公に選んだ弱い二人の男よりも、本当はもう少ししっかりした性格を持つ余計者の人物を主人公に持って来たか

ったのだと云っている。

その意味で「二人の不幸者」の新聞連載が終った大正七年七月、彼が「二葉亭のリアリズム」を書いていたことは注目に価する。この評論では彼は二葉亭の作の主人公を明らかに性格破産者と見なしている。更に「二葉亭を想う」（大正十年六月十七日—二十三日『東京日々新聞』）の中でも彼は詳細に二葉亭を論じ、二葉亭が勇氣ある人生の闘士であった半面、人間の性格の中にはほとんど救うべからざる病患を発見していたと述べ、二葉亭の心内に在る理想家と厭世家の相剋を指摘している。また彼は二葉亭の作の主人公がいずれも意志が弱くて実行力のない人間ばかりである理由について、それは実行家を志していた二葉亭の自己反省の産物であると云い、二葉亭は真剣に実行を考えたと云うに却って自分の心にある弱さに気がつき、自作の主人公を無氣力にせざるを得なかったのだと弁護している（昭和五年七月「文士の生活を喰う」）。

これらの二葉亭評はそのまま評者である広津自身にもあてはまるのではなからうか。彼もしばしば自己の内に在る理想と虚無の背反を認めている。性格破産者の弱々しい面貌の藪には思いがけない激しい理想家が隠れていたのだ。その後の彼の作家としての歩みを見ても、時流に敏感でありながらそれに流されることはなく、左傾も右傾もせず自由思想家の立場を守り抜いた一貫性に彼らしい「弱さ」そのものの持つ強さを感じられる。冒頭に引用した彼の感想の中の文学者的な「弱さ」とは彼の場合このような性質の「強さ」でもあったのではなからうか。作家的出発の初めに当って性格破産の克服を叫び、「性格の強さ」をねがって「志貫徹論」等を書いた彼が、昭和十二年という時点で文学者の「弱さ」の価値を主張した理由についてはもはや贅言を要すまい。また嘗ては性格破産の克服を

専ら個人の修養に求めた彼が社会や政治の動きをよそにした個人の修養を無意味と考えるようになったのは、時勢の相違とは云え注目すべきことである。そしてこのように解する時、はじめて「神経病時代」から「松川裁判」に至る道すじを彼の気質に即して裏付けることができるのではないかと思う。

注

(1) 感想集『愛と死と』（昭和二十二年版）所収。昭和十五年刊行の初版には収録されていない。

(2) 『大家』と『新進作家』の傾向の際立つた創作壇」（大正五年十一月『新潮』）

(3) 「如何なる点から杜翁を見るか」（大正六年七月『トルストイ研究』）の中で彼は修養によって性格の欠陥を或る程度是正できると述べている。

(4) この中のジュードの話は「如何なる点から杜翁を見るか」で再び引用され、『作者の感想』所収の「怒れるトルストイ」では削られてゐる。

(5) この続稿が「アルツイバアシェフの生命観」（大正六年六月『早稲田文学』）で、『作者の感想』に収録の際、両者が一文にまとめられた。

(6) 「如何なる点から杜翁を見るか」の末尾の一節である。

(7) 『神経病時代』の不満足から生れた『二人の不幸者』（大正八年一月『新潮』）

(8) 雑誌記者との問答録ではあるが、「広津和郎氏と生活と芸術を語る」（大正十四年六月『新潮』）の中で、自分は虚無的な傾向を持っているように人からも云われ、自認もしているが、何かの導火線があったら存外熱情があるのではないかという意味の発言をして居り、戦後では高見順から性格破産の意味を聞かれて「まあ、僕の中には、どこ

か理想主義的な所もあると思うんだ。だけど、それが自分の分裂みたいなものでね、およそ、それと反対になつてゐる。それで泥沼みたいな所へ入つたりするような気持があつたんで、ああいう言葉を使つたんですね」と述べている（高見順編『対談現代文壇史』）。

（『文学』昭和三十九年十一月号）

「性格破産者」の史的意味

—— 広津和郎の作家的出発 ——

高 田 瑞 穂

WHAT IS LIFE の思想に、HOW TO LIVE の思想が加はらずして、既存の人間関係や虚構の制度と戦へる筈はないではないか。
(再び『異邦人』について)

一

広津和郎は、大正六年十月の『中央公論』に「神経病時代」という奇妙な題名の小説を掲げた。既に評論家として知られていた広津は、この一作によって、新に作家としての出発を始めたのである。

これは作家広津和郎の出世作であり、それにふさわしく、それまでの広津の蓄積のすべての結果であった。数え年二十七歳の広津にとって、そういう蓄積として考えられるものの第一は、言うまでもなく二十七年にわたる生活そのものの、その第二は、『奇蹟』時代の習作、その第三は、「怒れるトルストイ」に代表される、評論活動である。それらの蓄積を、今、「神経病時代」前史として概観することから始めることとした。しかし、第一に関しては、自伝『年月のあしおと』の所在を言うに止めなくてはならない。自伝的色彩の

濃い「崖」「本村町の家」「悔」、それに「師崎行」「やもり」「波の上」と続くいわゆる三部作——それらとの対比において「年月のあしおと」をたどれば一層よい。病弱・不眠・貧困・文学青年・愛なき結婚——それらのすべては、そこに重厚な「あしおと」をひびかせてくるであらう。

『奇蹟』に掲げられた広津の習作は、全部で次の六編である。

「夜」(小説・大正元年九月創刊号)、「犠牲」(訳・ヴェデキント・十月号)、「眠り」(感想・十一月号)、「ねむたい頭」(訳・チェーホフ・大正二年一月号)、「握手」(小説・二月号)、「疲れたる死」(小説・三月号)。「奇蹟」は、大正二年五月号までで廃刊された。通算九冊である。うち六冊に広津の名が見えているのであるが、今は、六編の一つ一つに触れる余裕はない。一、二の注目点を挙げるに止めなくてはならない。まず第一に指摘しておきたいことは、「夜」と「ねむたい頭」との関連である。「夜」は、中学三年生波多山信次の錯乱の物語りである。三日にわたる行軍と不眠とに疲れ切った信次は、鉄の如き校規と、不気味に笑いかける栄子の幻影とに安息を奪われ、ついに、栄子の幻と重なった一人の友を刺すのである。